

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっかい生きてます!

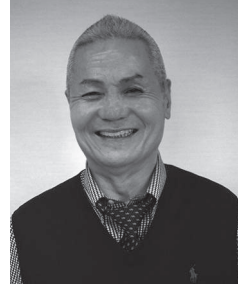


潮騒ジョブトレーニングセンターは今年もゴールデンウィーク期間中の5月4日、みんなが参加できる調理イベントに取り組みました。会場はお馴染みの茨城県立白浜少年自然の家で、大勢の入寮者らが男女混合で初体験のピザ&スパゲティ作りに挑戦しました。午後は近くの北浦での魚釣りやミニオリエンテーリング、ターゲットフリスビーを楽しみました。初夏を思わせる好天の下、施設とは異なる野外体験でいい汗をかきました。

2018

5

民衆の救済で決起した 大塩平八郎について思う



これまでも触れてきましたが、昼間の仕事を終えて夜間に定時制高校の授業に付いていくのは、私にとって一苦勞です。でも、曲がりなりにも継続が力となって、私の中に日々「学びの喜び」が膨らんでいます。情熱と使命感にあふれる先生方に教えを乞い、それまで知らなかった知識の奥深い世界にふれ、それが血肉となっているように思います。回復プログラムに取り組む施設での日常とは異なり、日々新鮮な感動に繋がっています。もっと早くに「学びの世界」に触れていたなら私の人生も変わっていたかなあ、とちょっぴり後悔もあります。でも、過ぎ去った過去は変えられませんし、未来だって予測できません。なので、変えられない昨日やミステリアスな明日に囚われるより、今日一日だけクスリを使わず、アルコールを飲まず、ギャンブルをせずに過ごそう！今日という日は、私達に等しく与えられた素敵な贈り物。これに習えば知識の獲得も同じで、「今日一日の学びを大事にしよう!」となります。

さて今回は、そうした知的な好奇心を満たす意味から、日本史の教科書のなかに少しかだけ登場する大塩平八郎という人物をケーススタディに、私なりに思うところを述べてみます。スタッフに依頼してネットなどで調べてもらったところ、以下のような記述に出会いました。大塩平八郎は江戸時代後期の陽明学者で、大坂町奉行所の元与力です。大塩の乱の首謀者として歴史にその名を残しました。大塩の乱は天保8年(1837年)に、各地で一揆や打ち壊しが多発した天保の飢饉に苦しむ民衆の救済と腐敗した幕政の改革を訴え、大塩が主宰する私塾の門弟や支持する農民ら約300人を率いて蜂起した、江戸幕府に対する反乱です。大砲を打ち込むなどして大坂の町の5分の1が焼けたとされます。たった半日で鎮圧され、後に大塩は処刑されますが、天下の台所において時の権力に公然と牙をむいたという意味では、民衆運動の先駆けとなった事件との見方もあります。この時、大塩は蔵書を売り払って困窮する民衆に金を配り、大阪の豪商らには今でいう資金カンパを求めました。そして「腐敗した幕府役人と、これと結託して暴利をむさぼる豪商人達に天誅を加え、『救民せよ!』という決起を促す檄文を市中にばらまき、これが人づてに全国に広がりました。

私が意気に感じたのは、この檄文中の一節、「若疑シク覚候ハバ我等ノ所業終候処ヲ爾等眼ヲ開テ看ヨ」(=もしも現下の窮状を疑わしく思うなら、私達の起こす行動の一部始終を、あなた方は眼を開いてしっかり見届けよ!)です。漢文調の難解な檄文ですが、これぞ男の心意気、古き良き時代の任侠道に通じるように思います。飢餓に苦しんでいる者を目の前にして、座しては救えない、という大塩の心意気には共感を抱きます。でも私達、依存症の回復者は常に自分達をニュートラルな立場におき、一切の争いに関わらない生き方を身上としています。当然ながら、時の権力に歯向かう力も考えも持ち合わせてはいません。あくまで私達は自分の無力を認めた存在です。パワーゲームから下りて、今後も自分達の身の丈にあった救済スタイルを模索していきます。(センター長 栗原 豊)

初挑戦 手作りピザ&スパゲティ

入寮者がGW中の潮騒イベントプログラムを楽しむ



潮騒 JTCは5月4日、ゴールデンウィーク(GW)期間中のイベントプログラムとして茨城県立白浜少年自然の家(行方市白浜)で、デイケア入寮者や女性ハウス「るみの家」メンバーら総勢約150人が参加して初体験のピザ&スパゲティ作りに挑戦しました。午後には少人数のグループに分かれて、近くの北浦での魚釣りやミニオリエンテーリング、ターゲットフリスビーを楽しみました。このうち釣りグループでは、今年も仲間のゲンさんが強い風で波立つ湖岸で大きなアメリカナマズを釣り上げていました。

今回のイベント会場は白浜少年自然の家内にあるいろいろの家と野外炊飯場などで、仲間達は21班の小グループに分けられました。断続的に施設職員の説明を受け、その手順に沿ってピザ&スパゲティ作りに挑みまし

た。このうち初めて取り組むピザは生地作りに始まり、各種トッピング具材を載せ、丸型ではなく四角に伸ばして成形。職員から「薄くのぼすのがポイント」などと具体的な助言を受けていました。

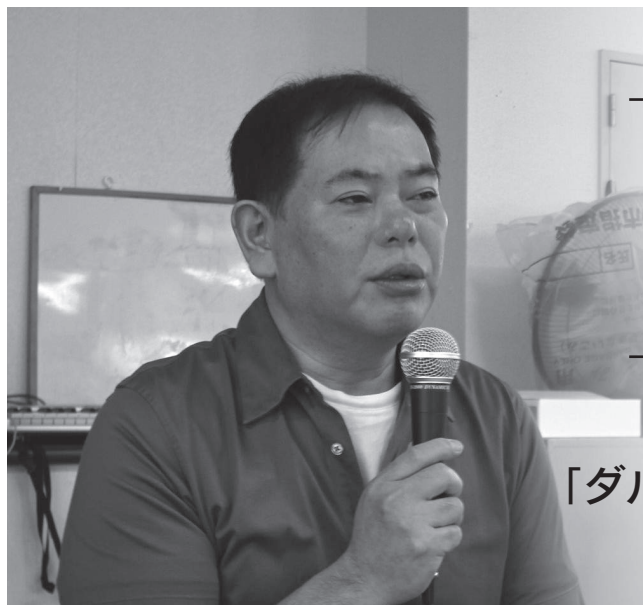
焼きあがると各グループごとに器に取り分けて、自分達の手作りピザを美味しく頂きました。この日は施設とは異なる野外の開放的な雰囲気、より一層食欲を増進させていました。入寮者達は仲間と協力して食べ物を作っていく楽しさを味わい、「いい出来だった」「自分達の手で作ったピザは格別!」と満足げな表情を見せていました。(潮)

ハンディを持つメンバーを誰かしらがカバーしていた

今年のGWイベントには特別な思いがあった。一年前、覚醒剤依存症の私が苦難の末に潮騒に繋がってすぐに、同じ会場でうどん作りに参加し、とても楽しかったからだ。だから1年後に同じような取り組みで、今度は仲間を引っ張る役割を与えられた事はハイパーパワーの計画なのかな、と思う。潮騒は個性的な仲間が多いだけに、班分けと出だして少しまごついた。でも、いざ始めると事前の準備もあってスムーズに進んだ。ピザ作りは初めてだけに、作業手順にまごついた部分は今後の反省点。また、こうしたイベントではどうしても参加する人、しない人に分かれる。向こうの職員さんの説明に聞く耳を持たない人もおり、最後の片づけも特定の人達だけがやっていたのは残念だった。

とにかく施設生活においては食べる事は大いなる楽しみ。みんなで協力し合って、全員で食べるのは理屈抜きで楽しい。これも非日常のイベントの効用だろう。男女一緒に参加するイベントが限られているだけに、こうした混合イベントはより楽しさを倍加させる。いい意味で刺激になるが、男女関係は行き過ぎるとトラブルのもとになるのでご注意を!

今回はピザ作りに初挑戦したが、気づいたのはハンディを持つメンバーを誰かしらがカバーしていたこと。口には出さずとも、ここには共生の原点がある。今後もこじんまりした施設ではできないイベントに挑戦したいと思った。午後のプログラムも班ごとに分かれて、スムーズだった。野外で太陽を浴びながら体を動かすことは最高! みんなから反省や意見を聞き、来年はもっと中身の濃い内容にしたい。最後にあれこれ動き回り、目配りに神経を使っていた女性ハウス施設長のルミさん、お疲れ様でした。(スタッフのジョー)



潮騒 人間塾

三浦陽二さん(日本ダルク)

「ダルクでクスリをやめ続ける」意味を
25年の歩みで実感

社会で幅広く活躍する人達から、依存症者が人として生きるヒントを学ぶ今年度第2回目の潮騒人間塾が5月12日、潮騒アディクションビレッジ会館3階の多目的フロアで開かれ、前回に続くダルクメッセージとして日本ダルク本部ディレクターの三浦陽二さんが講師を務めてくれました。

三浦さんは1963年、東京都生まれ。中学生の頃からシンナーや覚せい剤、大麻などに依存し、精神科病院への入退院を繰り返したほか、刑務所にも服役した経験があります。出所後にダルク創設者の近藤恒夫さんとの出会い、ダルクでのスタッフ研修、アメリカ・ヘーゼルデン研究所でのスタッフ研修を受け、1994年沖縄ダルク開設時にオープニングスタッフに就任。以来15年間にわたり、沖縄ダルクのチーフディレクターとして各地での講演や病院メッセージなどを行い、2011年からは日本ダルク本部ディレクターとして、主に広報活動などを担っています。

三浦さんは過去に潮騒フォーラムでも講話して頂いたことがあります。今回は三浦さんご自身の回復の歩みを中心に、人生の師でもある近藤さんとの関わり、現在の日本ダルクの活動状況について、さらに潮騒について思うこと一について本音で語って頂きました。とりわけ身近で近藤さんと接してきたことからダルクの持つ不思議なエンパワーメントについて、「社会の中でやめる訓練をすることが大事」「クスリをやめることをやめる」など逆説の妙味を力説し、近藤さんの霊性については「とにかく凄い人。でも霊性だと分かっしまえば霊性でなくなる」と会場を和ませてくれました。

また三浦さんは前半部分で、自分が薬物に親和性を持つに至った背景などを詳しく語ってくれました。母親が医師、父親が元ボクサーという恵まれた家庭に育ちましたが、小学生の頃はよくいじめられたそうです。しかし、不良とつるむようになり、中1でのタバコに始まり、シ

ンナーから覚醒剤、大麻…とオールラウンドで薬物を経験。大学に進みますが、薬物依存が進行して中退します。やがて逮捕・起訴されて1年間務めた刑務所では「二度とやらないぞ」と固い決心を抱きますが、出所時には「次は絶対捕まらないぞ」に変わっていたと言います。

たまたま母親の病院に水虫の治療に来た近藤さんに誘われて、シカゴでの薬物依存症者の世界大会に随伴したのがきっかけでダルクと関わるようになり、いきなり近藤さんから沖縄ダルクの運営を任されました。当時はまだ全国にダルクが数カ所しかなく、沖縄で苦勞しながらも以後はほぼ順調に回復して四半世紀をダルクとともに歩んできました。出会った当時、近藤さんが三浦さんに「手に入らない刑務所の中でやめさせられるよりも、手に入りやすい社会の中で一緒にクスリをやめ続けるトレーニングをしよう」と誘ってくれた意味が、やっと実感として分かるようになった、としみじみと語ってくれました。

現在の潮騒については、早くから取り組んだ裁判所へのメッセージ活動などを高く評価し、「関連施設が約90カ所にまで増えたダルクの中でも、ユタカさんは常に他がやっていないことをやっている」「施設規模の拡大に否定的な意見もあるが、地域に受け皿が増えることはそれだけ回復者が増えることに繋がる」「ダルクで良くなった人達は社会の中に埋もれてしまい、なかなか姿が見えない」として、「どうか無責任な風評に惑わされず自分達のやり方を貫いてほしい」と希望のメッセージで講話を締め括りました。(み)



「追悼トークリレー」で元職人のシンさんを葬送 潮騒らしく入寮者が故人の思い出を語り合う

潮騒 JTC の初期から仕事プログラムを下支えした元造園職人のシンさん（本名・若谷新一さん）が内臓疾患により死亡し、鹿嶋市内のセレモニーホールで5月8日にしめやかに潮騒葬が営まれました。享年75歳でした。

シンさんは埼玉県さいたま市出身で、栗原センター長とは竹馬の友の関係でした。生涯にわたる良き友人の一人で、若い頃はお互いよくつるんで遊んだ仲であり、厳しい修行を経て腕のいい植木職人として活躍したようです。一方で、シンさんはアルコールに深刻な問題を抱えていました。次第に仕事もままならなくなり、家族や友人らも離れて、晩年は故郷で不遇な環境にありました。見かねた栗原センター長が「潮騒に来いよ」と誘い、快諾したシンさんにスタート間もない作業プログラムの指導を託しました。

栗原センター長は、前身の鹿嶋潮騒ダルク時代から社会復帰に向けた就労支援に特化した施設づくりを計画し、過去に仕事経験のあるアルコール依存症者の多いメリットを生かして、土木や建築、造園などに関係する便利屋的な請け負い作業を地元で開拓してきました。その際に、キーマンとなったのがシンさんでした。昔気質の気難しい職人の側面はありましたが、積極的に仲間達を引っ張って、施設の仕事プログラムに位置付けられた各種請け負い作業のノウハウを現場で身に付けさせました。特に専門分野の造園作業

は地元の熱い信頼を得て、リピート仕事が数多く舞い込みました。

終の棲家となる潮騒という安全安心な居場所と、生きがいに通じる自分の役割を与えられた事で職人としての手腕を発揮したシンさんでしたが、最後まで自らをアルコール依存症とは認めず、施設が提供する回復プログラムにも加わりませんでした。残念ながら、マイペースの飲酒を施設内の自分の部屋で繰り返し、結局これが原因で重篤な内臓疾患となり、ここ4、5年ほどは闘病生活が続きました。この事は栗原センター長を人知れず悩ませましたが、施設にとっては「生きた反面教師」として、シンさんなりの生き方を貫いたとも言えます。

シンさんとお別れ会は、入寮者全員とスタッフ、職員が参列して市内のセレモニーホールで営まれました。祭壇には生花に替えてシンさんの作業風景などをとらえた思い出深い写真が数多く飾られ、在りし日を偲ばせました。今回も導師には頼らず潮騒独自の葬送スタイルで、栗原センター長を皮切りに付き合いのあった仲間が次々とシンさんとの思い出を語り、冥福を祈りました。仕事&農業プログラムで付き合いの長かった支援者の増古四郎さんも参列し、シンさんとの思い出を振り返ってくれました。とても印象に残る潮騒らしい葬送の形でした。合掌。(潮)

埼玉県吉川市の民生児童委員が 研修来所

潮騒の就労支援と百寿の介護活動に理解深める



埼玉県吉川市の民生委員と児童委員ら約30人が5月16日、潮騒ジョブトレーニングセンターのアディクションビレッジ会館(鹿嶋市宮中)に研修来所し、潮騒独自の就労支援や依存症者向け介護サービス「百寿」の活動についてスタッフから映像を使って具体的な説明を受けました。

同じ埼玉県出身の栗原豊センター長は、父親が3歳の時に戦死して里子に出され、不良少年から暴力団への道に走った経緯と、酒や薬物に依存するまでの経緯を語りました。その上で栗原センター長は、刑務所から出所した依存症者が再犯を繰り返してしまうことについて、「社会の中に居場所がない事が問題。再犯防止という面でも居場所の提供が必要」と述べました。

潮騒の就労支援の根幹である「農業プログラム」について農業隊リーダーのヒトシさんが開墾や農作業、干しイモ作りの様子などのスライド映像を交えながら農業プログラムの説明をしました。課題として、地域へ向けた依存症理解への活動の不足、就労時間と自助グループ参加への両立問題などを挙げ、改善策として「半就労・半福祉」を基本に焦らず、じっくり社会復帰を図ることなどを説明しました。

一方、潮騒の関連団体である高齢者介護デイサービス「百寿」の運営に当たるマコトさんが、百寿での依存症者の介護について「潮騒の高齢依存症者の終の棲家として

の受け皿になっているが、この4年間見ているなかで大きなトラブルはない」と説明しました。マコトさんは「依存症の方々もいずれは介護が必要になる」と述べ、要介護の依存症者に対しては「職員には私から“普通に接してくれ”と指示を出している」と説明しました。要介護の依存症者に対しては「暴れてほかの人を傷つけるのでは…」という偏見がありますが、マコトさんは「もっとこういう活動が広がれば偏見なく見れるかも」と期待を寄せました。

参加者からの質疑応答では、アルコールを断ち続けることの難しさなどについて質問が寄せられ、栗原センター長は「日本の社会だと“アルコールは合法だから”と許しちゃうことが問題。周りに飲まない人がいないと、やめ続けることは難しい」と答えました。

与えられた任務をやり切り 心地よい達成感を味わう

僕はこれまで、自分で何かをやってその成果を自分で感じることはなかったように思います。でも今回初めて、資料等を来所者に配る意味合いがやっと理解できました。また、スタッフの仲間も職員も一緒になって、お客様をもてなすという意味合いにも理解が深まりました。そうして「自分にもこんな事が出来るんだ」という達成感を得ることができ、こんな自分も施設のなか

では大事な歯車の一つとして機能していることも分かりました。

研修前日の夜に、デイケア四階の会場セッティング段階からスタッフさんの手伝いに加わり、今の自分にできることをさせていただきました。会場準備をスタッフとやって、以前から作成していた資料を椅子に並べていきました。この段階ではまだ、「明日はいったい何が始まるのかな？」位にしか思っていなかったのです。そんな消極姿勢だったからか前夜の作業が終わらず、当日の朝早い段階(午前8時頃)になっても、この日使用する資料作りをしていました。

ある程度準備が出来た頃には、僕は一階で吉川市の方々が到着したときに備えていました。そして少しでも時間に余裕があれば、4階まで駆け上り職員の手伝いをさせていただいていました。僕は、この位出来れば充分だと自分勝手に思い、満足していたのです。実際に吉川市の民生児童委員の方々が到着したときには、すっかり準備万端でした。そして吉川市の方々に予め準備していた資料等をお配りしました(実際には足らなかった部分もありましたが…)。

恐らく過去の自分だったら、今回の研修場面のようにしっかりと一つのことを成し遂げられなかったと思います。こんな作業は僕の任務じゃない、だから中途半端でもいいんだ、やらなくてもいいんだ…等々、言い訳して早々と現場から逃亡していたと思います。それだけに今回は十分に満足でした。参加者の方々が観たパソコンを使ったスクリーン映像時には、外の光が屋内の会場に入らないようにするため、ブラインド下ろしを僕と広報部の仲間2人でやりました。結果、案外しっかりやれたと思えました。

結局、来所された委員の方々が帰るときまで、自分の神経は張りつめた感じになっていました。でも、終わったときにはホッとして、心地よい達成感を味わいました。今までの人生でこれ程頑張れたことはなかったように思いました。僕は元来、何でもしっかりやれると思っていましたが、実際はしっかりどころか“何も出来ない”人間なのです。でもこの日はそうではなく、しっかり物事を成し遂げた一日になりました。これまでの人生に於いてこの日程、しっかりできたことは後にも先にもなかったです。後日に物凄い疲れが襲ってきましたが、それも心地よい疲れで、いい思い出になりました。次の機会にはもう少しステップアップしたことをやらせて頂きたいです。今回は良い経験をさせていただき、ありがとうございました。(広報部 イチ)

昔ながらの手植えに挑戦 潮騒農場田植え体験

北浦に近い潮騒農場の水田(鹿嶋市中)で5月16日、恒例の田植えイベントがあり、農業隊や潮騒のデイケア仲間達約30人が参加して、昔行われた手植えによる田植えに励みました。

仲間達は、代掻きで一面に水が張られた約5畝(約4.95アール)の水田に苗を手にして素足で入り、1本ずつ手で丁寧に植えていきました。水田の中はぬかるんでいて足が動かしぶらい状況でしたが、仲間達は苦戦しながらも田植えに励み、約2時間掛けて田植えをやり遂げました。

潮騒農場には多くの水田があり、ほとんどの水田では田植え機で植えますが、この水田の1区画だけは仲間達に達成感を体験してもらうため、農業隊が下支えして「手植え、手刈り」にこだわっています。

初めて田植えに臨んだケンジさん(47)は「腰が痛くなって疲れるけど楽しかった。『やったー!』という達成感がある。今は(田植えは)機械だけど、昔は手でやっていて大変だと感じた」と話しました。(サッキー)

仲間たちが植えた苗が順調に成長すると、9月上旬ごろには稲刈りができる予定です。



がーちゃんの 極私的懺悔録

「他人事だと思って…」

その
3

「真実の愛」を貫こうとするも
貧しい現実との相克から
妥協へと進む

【PRめいた著者プロフィール】

- ❖ アノニマスネーム「ガーゴイル」(36歳/男性)
- ❖ 出身：北関東の田舎町
- ❖ 前職：元詐欺師(自称)のような仕事&元介護福祉士
- ❖ 病歴：鬱病・発達障害・自閉症・
各種依存症(薬物・アルコール・女性・対人関係 ets)



人間は頭脳があり 優れた交換価値を生み出した

私は空腹を覚えた。全く人生というのはままならないもので、一日ナンもせずとも腹が減る。野生の畜生なら腹が減ったら草なり、自分よりも弱い動物の肉を食うなりすれば、空腹は満たされるだろう。が、そこは私も一応人間サマなので、草なんて食べたらお腹を壊すだろうし、野生の弱い動物、例えばウサギなんかを食おうとしても、まずそこら辺にはいない。スズメを獲ろうにも運動オンチの私には至難の業だ。人間というのは、航空母艦や原子力発電所などをこしらえて、「ウホホ」と悦に入るが、生身の体一つでケンカの一つもしようものなら野良犬にだって負けるただの猿。万物の霊長を気取っているが、他の動物よりも多少脳みそが大きい、鈍臭い生き物なのである。「ハハ、実に愚かなり!」と思った次第だが、かく言う私もその人間。どんなに自分をくさしたところで腹は減る。ではどうするか? よくしたもので人間には頭脳がある。(本性はどうであれ)よほど生命のピンチに陥らない限り、食い物をめぐって血みどろの争いをしなくても良いように、優れた交換価値を生み出した。そう「お金」である。お金を払えば食い物を手に入れることができる。「食べるため」にしていた採集や狩猟などは、今や好事家が「お金」を払って楽しむレジャーに成り下がっている。人間サマ、凄いで〜す、などと能天気なことを言っていられない。なぜなら、お金を得るためには仕事をせんとあかん。もしくはリスクイカツイイーガルな犯罪をおかさないといけない。

じゃあ「オメーはどうなんだよ、オイ」と自分に向かって尋ねたところ、まあ私は毎日酒を飲んで暮らしているので収入はゼロに近い。一応会社には、鬱病と言って休んでいるので、傷病手当が幾ばくかは入ってくる。ただ出ていくものも多く、電気、ガス、水道、各種支払いで生活はギリギリ、青息吐息である。まあ、本音を言えば結構キツイのである。

宅配ピザを頼んだが 不覚にも寝てしまう失態に

で、私はいつも飲んでいるウイスキーが残り少なくなったので、近所のコンビニに出掛けた。「いらしゃいまし!」「いらっしゃいました!」。例によって漫才口調で店員と挨拶を交わし、酒類販売コーナーへ。ウイスキーにも色々あるが、私はいつも一番低級の安物を購入する。理由は、旨くもなければ不味くもないからである。飲み慣れている、つてやつちゃね。それを手に持ちレジ前に。すると、どういう訳か激しい空腹感が襲ってきて、目の前にある少し大き目のメロンパンに釘付けになった。最近食事をしたのはいつだろう? そういえば二日前に宅配ピザをとったわね(急にオネエ言葉になってしまった…)。

最近はアルコール依存症の後遺症がひどく、胃腸が弱っているのか、何を食べても戻してしまう。もったいないので居酒屋で食べるつまみ以外には、お金を掛けなくなってしまった。だから宅配のピザなんて豪勢な食事をしたのは、私の気の迷い、病気のなせる業であり、今だか

ら言えるが、宅配の兄ちゃんには大変迷惑を掛けてしまった。あの時は本当にスナマヘンでした。

振り返ると、その日はとても雨が強く、外出する気力も失せて夕方から飲んでた。私は飲み始めると勝負が早く、不覚にも二時間くらいで寝てしまった。目が覚めるといつになく腹が減って、見境なく宅配ピザを頼んでしまったのだ。でも、ピザが届いた時にはもう眠くてたまらず、インターホンが鳴っても玄関に出られないほどガッツが萎れてしまい寝てしまった。しかし、このピザ屋の兄ちゃんは見上げた人物で、後で分かったことには主である私が眠っていても3度も訪ねてきたような…。

悲劇の創作物は「真実の愛」を得られない慰めか？

私はこの「三顧の礼」(注:目上の人が格下の者の許に三度も出向いてお願いをすること。中国史で劉備が諸葛亮を迎える際に三度訪ねたとする故事に由来する)に報いるべく、今後兄ちゃんが「蜀」という国を興す際には優れた軍略を提供しようと約束したのだが、兄ちゃんは「アザーした」とだけ言って帰った。私は冷めたピザを平らげその後、目いっぱい胃袋から戻したのである。因みに冷めたピザは「とてもまずくて食えたものではない、魅力のない」例えなのだが、まあ私にとっては食べ物なんて、こんなもの。別に温かくななくても手軽に食べられるメロンパンの方がびったしカンカン。私のメロンパンへの愛は太陽より熱く、海よりも深いのだよ、ウフフ…。

だがしかし、愛し恋しと言ってはみたものの、世の中そうした熱烈な愛が簡単に叶うなら、悲劇的な結末を迎える物語など存在しない。むしろ、熱烈な愛が叶わない悲劇の方が世の中には数多い。ハムレットや金色夜叉など文学や演劇、いわゆる芸術の世界と言われるものはすべて悲劇である。なぜかと言うと、理由は簡単。「真実の愛」というものを理解して勝ち得る人はもの凄く希少な人で、大抵の愚民たちは「真実の愛っぽい何か」でお茶を濁して、「真実の愛」の探求をやめてしまうからである。なので世界的に悲劇的な創作物が多いのは、「真実の愛」を得られなかった人たちへの慰めという結論になる。

愛を得られなかった人達は悲劇を見て、自分にそれを投影し、共感し、感動する。ある意味、それも悲劇である。お財布を落とす。警察のご厄介になる。ぼったくりにあう。身長が165センチしかない。性病を移される。いいおっさんなのにバツイチやもめで毎日ボウフラのように生きている。足が臭い…など私自身も気の滅入るような悲劇に日々教われている。

私にとってタバコは必須な「生命維持装置」なのだ

私はありがちな運命論者ではないが、変えられない現実を、善人面して都合よく解釈して達観を装う偽善者ではない。そうした人達を揶揄する意地悪さも持ち合わせてはいない。その間を揺れ動く、ごく弱い存在なのである。ただ、少しだけ理屈好きなので、人間が生きているというのは、誰かのお陰みたいなものによって生かされている、ぐらゐの心の余裕はあるのだが… ああ、また私の悪い癖が出てしまった。またしても時間を浪費するだけの、禅問答のような隘路の罠に嵌まってしまいそう…。

さて、話を戻そう。要は私達の日常は「変えられないものを変えていく勇氣」(平安の祈り)よりも前に、どうあがいても変えられない理不尽? な現実満ち満ちている。今、私の最大の悲劇は財布のなかに千円しかないこと。もし私の「真実の愛」がメロンパンなら、是が非でも購入しなくては行けないのだが、そうするとタバコを諦めるといふとんでもなくリスク一かつデンジャーなジャッジを迫られる。

私は、必ず一時間に一本はタバコを吸わないと死んでしまうので、タバコは必須なアイテムというより「生命維持装置」なのだ。いつもなら常時5箱ほど用意しておき、足らなくなると補充するライフスタイルなのだが、昨日たまたま行ったキャバクラで、愛用しているデュポンのライターを盗まれたものだから、調子にのって6時間で4箱も吸ってしまい、今の手持ちは10本。これでは容易に明日まで持ちこたえるのは不可能だ。

さらに私の体は、酒を飲んでいる時にタバコを吸うと、大変気色の良い状態となり、「生きててよかったな」なんて柄にもないことを呟いてしまうくらいの極楽を味わってしまうのである。メロンパンが「肉体の愛」なら、タバコは「精神の愛」。互いに真実の愛には違いないが、それらの愛を買うにはキャッシュが必要となる。でも、私の手持ちは千円。酒、メロンパン、タバコ。どれかひとつ諦めねばならない。

私の頭は風雲急を告げ、野は干ばつによって干上がり、イナゴは作物を荒し、人心は乱れ、邪教が時の為政者にとって変わる。まさに三国動乱。愛とはまさに勝ち取り、時に奪い、そしていかなることが起きようとも後悔しない決断が必要である。私にそんな重大な決断がデキルのか? この後、私は悪魔のささやきに自分が試され、結局「真実の愛」とはたゆまぬ妥協であることを思い知るのだが…。(以下次号に続く)

受刑者からの手紙

満期時には自分に最良の道を選択していこうと思う

拝啓。世間では大型連休を謳歌しているころでしょう。そんななかではありますが、シゲさんは如何お過ごしでしょうか？ 連休は潮騒で何か行事があるのでしょうかね？ 広報担当のシゲさんとしては多忙のことでしょう。くれぐれも無理だけはせず、心に余裕を持ち、体調管理だけは心掛けてください。

さて、早速ではありますが本題に入ります。私の状況ですが、満期が7月なのに1月には、準備面接が実施されたため、3ヶ月位仮釈放を貰えるのではないかと期待したものの、結果的には最低期間の1カ月に留まりました。今思うことは、こんな1ヶ月間のために多大な気苦労や辛抱、我慢、そして無事故を強いられたと思うと、最初から満期で気楽に生活した方が良かったと思っています。出所は6月上旬頃か、と思われます。帰住地は都市部の更生保護施設になりました。ここは仮住居であり満期を迎えた時には、自立資金を貯蓄し退会しなければなりません。そのため、出所直後にも就労しようと思っており、受刑中にも会社を決めてしまおうと現在、就労支援を受けています。

恐らく職種は、建設業、解体業、とび職、土木関係に経験則からなると思います。反社会組織に長いこと身を置いていて、小指の欠損等もあり、それ位しか選択肢がないのです。建設業なら協力雇用主も豊富であり、就職可能と思われます。出所して満期まで1ヶ月間と、十分な自立資金が溜まる訳もなく、働き出した会社に寮でもあれば、入寮するのも一策ではあります。しかし、私のアディクション問題もあり、焦ること無く慎重に、自分にとって最良の道を、満期時には選択していこうと思っております。当然、シゲさんやユタカさんが提案してくれたように、潮騒に入寮することも一考しており、今ではその方向に大幅に傾いている私がいいます。

話は変わりますが、シゲさんからのお手紙、3月末には私の手元に届きました。いつもシゲさんからの手紙には温もりが感じられ、元気、勇気、そして回復と云うかけがえのない贈り物を頂いています。本当にどうもありがとうございます。内容ですが、“潮騒に入寮して2年8ヶ月”とのこと、私がこの刑務所に務めている期間と同等なのですが、シゲさんは2年8ヶ月のクリーンで、私は回復のスタート地点にも立てていない…。一体、この差は何なのでしょう？ クリーンは競い合う物ではないとはいえ、比較してしまうのは人間の心情だと思います。私が出所、満期のころに、シゲさんは3年のバースディですね。本当におめでとうございます。シゲさんのバースディミーティングには、御礼も兼ね必ず足を運ぼうと思っています。

実は、今回の懲役では心より思うことがあります。NAプログラム(12ステップ)を入所以来、何回も何回も繰り返し行い、懲役生活ではあるけれど取り入れ、実践しているのです。私はかれこれステップを6回繰り返し、リスト等のノートは4冊にも及んでいます。これからも、私がどの様な道に進もうとも、目指す先は、シゲさんと同じ依存症からの回復しかありません。シゲさんからも力を貰い、勇気を貰い、指導や提案、意見などをして頂き、シゲさんも言っている様に“人生前向きに、今日一日だけを歩み続けていこう”と、決意しております。

先程も申しましたが、現在の私の実際の心情、心持ちですが、“今日一日だけ”“NA プログラムに生きる”事は既に決めているのですが、「仮釈放で出所するのもハイパーパワーの計画なのだから精一杯、社会で働いてみよう、出来る所までやってみよう」と思っております。私の人生、神に委ねてみて、それでも躓いたり、苦しくなったり、辛くなりシゲさんに助けを求めるかもしれません。その時はどうか、手を差し伸べて頂けますようお願い致します。

最後になりますが、冒頭でも記したように、5月の中旬には仮釈放準備になると思われます。よって今回のこの手紙が私からの受刑生活最後の手紙となります。長い間、自分勝手なくだらない手紙に付き合わせてしまい、誠に申し訳ないと思っています。私にとり、手紙は、回復に直結している道具(ツール)であることは先程も申したとおりです。シゲさん、本当にどうもありがとうございました。(神奈川県 K・R)

前号でも述べたように、施設との相性や繋がりや濃密度などに差はあっても、どんな形であれ縁あって「潮騒きょうだい」と呼べる仲間の受刑者が増えているのは、例え細い糸であろうとも施設にとっては“やり直し”が可能となる絆につながるの嬉しいことだと考えます。

ここでしか出来ないことを 今、一生懸命にやっていく

前略。お手紙有難う御座います。毎回楽しく拝読させて頂いて居ます。シゲさんの場合は、アルコール依存症ですよ、2年8ヶ月間お酒を吞まれている、とのことですよ。アルコール依存症の場合、お酒を吞む場面が夢に出て来ませんか？私は薬物依存症ですが、(多分ですが)薬物依存症の方々は80~90%の人は夢に出てくる人がいる、と私は思います。「何も夢にまで出てこなくても…」と思うかも知れませんが、恐らく脳が薬物による“気持ち良さ”を分かっているからでしょうね。それだけ依存性が高いのですね。

こんな私でも、潮騒ジョブに入所して回復のプログラムを続けていけたら、完治は無理でも普通に生活出来る位になるだろうか？と思う時が多々あります。まあ、自分の頑張り次第だとは思いますが…。でも、このまま刑務所への入退所を繰り返していたら、今まで築き上げた信用も何もかもなくしてしまいます。今度こそ、それだけは避けたいと思っています。高い希望を思っていない。普通に生活出来ればそれでよい、と思っております。

(北海道 N・S)

まず1年を目標に(薬を止めた生活を) 頑張っていきたい

栗原センター長、シゲさん、お元気ですか？毎回シゲさんからの温かいお手紙を頂き、ありがとうございます。シゲさんは、潮騒でお世話になって2年9ヶ月とのこと。もうすぐ3年目ですね。禁酒生活を続けていくなかで、今も飲みたい気持ちはあると思います。そんななかでの禁酒生活、とても大変な思いをされてきたと思います。それと同時に“良く止め続けられるなあ”と、感心している私がいます。

残刑期も1年を切りました。一度部屋にて頭を洗って戒告処分となりましたが、このまま何事もなく生活していけば、仮釈を貰えると思います。一日も早く出所できる様、これからの生活を頑張っていこうと思っています。シゲさんももう少しで3年目です。3年目に向かって一日、一日を大切に、そして体に気をつけて生活して下さい。では、今回の手紙はこの辺りで…。シゲさんからの温かいお手紙を待っています。

(北海道 Y・Y)

私が潮騒に帰るまでの間にセンター長と話がしたい

前略。またお便りいたします。過ごしやすい季節となり、私も回復への道へと毎日頑張って生活しておりますので、安心して下さい。4月分の報奨金を貰いましたが、嬉しいことがありました。オヤジが今月から割増を6割に付けてくれまして、等高も4等にて5,500円を貰う所までできました。以前は2、3千円の繰り返しで、中々報奨金が溜まらなかったのですが、今のオヤジに変わってからは、報奨金も上げてくれました。“真面目に一生懸命に遣ってきて本当に良かった”、と感謝の気持ちで一杯です。

残刑も10ヶ月を過ぎ、今のオヤジのままで出所したいと思っていますので、センター長、安心して待っていてください。私も頑張って行きます。そこでセンター長に是非とも伺いたいことがあります。それは「私が潮騒に帰るまでの間に、私はセンター長とお会いしてお話したい」と思っています。その希望は叶うのでしょうか？シャブ教育もなかなかありませんので、センター長に会うことができません。これでは何かと不安だらけです。書類だけでは私のこと、性格や容姿等を知ることにはできないと思うし、これを機に是非センター長とも話をしたい、と思っています。私の願いは叶いますでしょうか…？

(東京都 K・K)

しおさい、俳壇

5月のお題

田植え

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.52

センター長 栗原 豊

たった1日しかシャバにいらなかった自分を呪った逮捕劇

姪は私の出所に備えて、今度こそ叔父の私を立ち直らせようと周到な計画を立てていた。いち早く藤岡市内にあるダルク関連施設への入所準備を進め、翌日には私を連れて訪ねることです承を得ていた。そして出所当日は、アディクトにとって一番大事な自助グループへの参加を促し、同じ病気の仲間達との触れ合いを体験してもらい、施設へのスムーズな繋がりを期待した。確かに、私はミーティング会場の教会では、隠すべき罪深い私の過去を素直に語ることができ、参加者に歓待された。この空間では依存症の新参者こそが珍重される。酷く狂った状態で辿り着いた者こそが、最も神に近い存在として遇されるのだ。文字通りこの夜のミーティングの主演は私だった。この世で、自分が生き続けるルールとして、自らの肉体の一部を失うまで、鋼のような虚勢を武器に生き、それしか正しいと知らなかった私が、この不思議な空間では虚勢を足もとに下ろし、すべてをさらけ出すことができた。初めて自分が周囲に受け入れられた瞬間だったが、本物の不思議な力に身を委ねるには、まだまだ越えなければならないハードルが控えていた。

「今日はとても疲れたよ。悪いが、俺をホテルまで送ってくれるか…」とにかく一人になりたかった私は姪の自宅に泊まる事を辞し、懇願して前橋市内のビジネスホテルをとってもらっていた。ホテルに到着すると私は、「今夜はぐっすり寝かせてもらおう。すっかり世話になったな。明日また電話する。できたらしばらく休養したいな。もっとも先立つものもあまりないけどな。とにかく今日はありがとう」。そう言ってホテルの玄関前で姪と別れた。しかし、その夜、私は連続飲酒によって3日間にわたりブラックアウトを起こし、時間がストップしてしまった。そして大宮署の留置所で目覚めることになる。担当刑事の話では、私はホテルの部屋に常備されていた酒類をすべて飲んでしまい、酔った勢いで大宮市の知人に金の無心で電話したが、「金は一銭たりとも貸せない」とする相手の対応に激昂し、すぐさまその知人の事務所に包丁を持って訪れた。私は警察に通報され、銃刀法違反と恐喝の容疑で大宮署に逮捕されたのだった。

次第に明確になっていく意識の中、留置所の鉄格子の冷たさが私を少しずつ正気にさせた。そうして自分のために無償の愛情を注いでくれた、姪への完全な裏切りであったことに気づいた。「ただ一人、俺を信じてくれた身内の姪さえも裏切ってしまった。あそこまで温かく刑務所のなかの俺を支え、手紙で激励し、身内の温もりを伝えてくれた姪を裏切ってしまった…。出獄したものの、たった1日しかシャバにいらなかった自分を呪うかのように私の気持ちに改悛の情が湧いたのだった。(次号に続く)」

手植えして

くねくね植田

懐かしき

めい

稲作は弥生時代に伝わり、昭和の中頃まで手植えで定規や縄で印を付けたりしたが、広い田では植えた後が曲がっているのも手植えの趣があった。50年前頃に機械化されたが、能登の千枚田などの田植は観光化して昔を伝えている。

大利根の

処々に広がる

田植かな

みく

田植には棚田、狭田、浮田、山田、広田など夫々に趣きがあるが、利根川流域の広大な田園は早場米と言われ、四月になると方々で田植が始まる。昔はこの広い田を大勢で植えたが、今では一人で機械植えをして寂しい感じもする。また、「親族も集ひ田植の故郷かな」も佳句で懐かしい。

田植え了へ

入り日静かに

浪逆浦

文秋

浪逆浦干拓は昭和十七年頃から十年近く行われ、広い田園になった。内浪逆は今では日の出団地になったが、外浪逆は今でも広い田圃と浦曲が残る。その広い田の田植も終わり、浦曲と植田の漣(さざなみ)に映る静かな夕日もまた美しく心が安らぐ。

特選句

特選句

特選句

秀逸句

今月の秀逸句

田を植うる

一つ一つに

心込め

なんちゃん

今では手植えは余りしないが、それでも機械植えの残りや棚田などは手で植える。その方が如何にも苗育てよと思う気持ちが籠るが、昔は重労働の一つでもあった。

広々と

田植えて潮来

みずみずし

くま

潮来や十二橋辺りは、昔は十六島などと言われ、洲が島の様に多くあり、小舟で行き来した。今では干拓などで整地され広い田園だが、田植の後は水路や常陸利根川、与田浦などと共に植田の水も広がり、水々しく思えます。

利根川の

風の行き交ふ

田植かな

メーテル

川や湖に近い処は朝夕陸との温度差で風が出易い。歌謡にも利根の川風と歌われる様に風が吹く。その風の中で田植をし、さざ波が広がるのも水郷の田植で植えた早苗が風に靡(なび)くのも美しい景です。

朝早く

孫も手伝う

田植かな

もと

昭和の頃は農繁休暇があり、田植や稲刈りを手伝ったのが懐かしいが、今は子供の手伝いは少ない。もう大きな孫さんか、微笑ましい光景の句です。

帰省子の

田植手伝ふ

頼もしき

あべ

テレビなどでも都会から里へ田植に帰るのが紹介され微笑ましいが、それは農業の後継者不足でもあります。帰省の子を頼もしく思い、後を継いで欲しいとも思う句です。

天皇も

手足を汚し

田植かな

ひろ

天皇家では今では私的な行事として天皇は五月に田植をされ、皇后様は給桑をされる。秋に稲刈りをして新嘗祭に供えたと伝わる。天皇を身近に思う句でもあります。

佳作

豊作を願ひて田植泥だれけ	びのこ	田植して実り待つ日も楽しけれ	あきら
田植え終え育つを祈る夕べかな	れいこ	実り待つ八十八手間田植かな	しま
この時期は多雨の日ながら田植かな	いるか	田植して炊立てご飯食べたきや	アッチャン
猫の手も借りたき日々の田植かな	ちゃこ	経験無し一度はしたき田植かな	まこ
田植には虫がよりつく可愛いな	みに一	田植了へ畔に汗拭く老婆かな	ユーミン
田植しておいしいお米待つ日かな	カヨコ	利根空に燕飛び交ふ田植かな	文秋
大切な稲穂を守る案山子かな	ゆうこ	子ら五人並びて里の田植かな	なん
子供等は田植の水路で目高捕り	みく	晴天の植田に映る彼女かな	あお
田植して蛭に噛まれし昔かな	よつちゃん	田植え終えスイスイ泳ぐ水すまし	こば

どっかい

私も生きてます～我が回復記～「ブーちゃんの回復記」

第17回

都内の病院や更生施設での飲酒トラブルを経て潮騒に繋がる

回復の邪魔をする歪んだ男女関係について、AAの仲間達からの冷静な助言や忠告に僕はまったく聞く耳を持ってないどころか、見返してやろうという挑戦的な態度でしか応えられませんでした。「自力でバイトして稼ぎ、生保を切ってやる」と大見えを切り、2013年の7月頃から約半年間、介護や造園のバイトに励みましたが、収入のほとんどは遊興費や飲み代に消えました。なんとか11月頃までは頑張っていたのですが、「あなたもう治ったんじゃない」という彼女の一言で寝酒を始め、当然ながら連続飲酒となりました。現場の行き間違い、遅刻、無断欠勤…造園のバイトはクビになりました。僕は最後にもらった8万円を、潰れる覚悟で飲み代に使い切りました。うまく飲めるという勝手な思い込みから自分を試す実験の結果、いつものように自滅するパターンでした。もはや私は飲んでいなくても、昔の生き方や感情に戻ってしまいます。すっかりお手上げ状態でした。

翌年正月には都立の精神科病院に3か月入院、引き続き八王子市内の精神科病院に入院してアルコール依存症の回復プログラム(スマーブ)を受け、10月末にここを退院して新宿の更生施設に入りました。日中はデイケアに通い、夜は更生施設で過ごしましたが、ここでも私のお酒は止まらず6回ぐらい隠れ酒をしました。その間にも彼女と連絡を取り合い、彼女を財布替わりにして飲んでいました。ここでは1回目は許されるのですが、2回目はアウトです。「うまく立ち回れていれば飲めるし、何たってアルコールは罰せられないからな」。そんな言葉の誘惑に負け、飲み仲間にホイホイと後を付いていった結果のペナルティーでした。コンビニでの隠れ飲酒が施設職員に見つかり、僕は退所を命じられました。

すでにアパートは解約しており、僕には行き場がありません。そのため再度、前年に入院した都立の精神科病院に「解毒」の名目で、行き先が見つかるまで入院しました。2月末に病院のケースワーカーから「どうですか? いっそのこと環境を変えてみませんか?」と提案があり、潮騒JTCのHPのコピーを見せられました。「茨城か…」。僕にはもう迷いはありませんでした。二つ返事で「じゃあ、お願いします」。こうして僕は2015年の3月10日に潮騒に入寮しました。

当時、潮騒についての知識はほとんどありませんでしたが、「もう都内にいる限り無理だ」「どうせまた女性を巻き込んで利用するだけだ」という反省がありました。それに潮騒には、「酒なんかやめて、みんな一緒に頑張って回復していこうよ」という、前向きで理想的な施設イメージを一方向的に描いていたのでした。

(次号に続く)

5月のバースデー

まさひろ



ありがとうございます。

まーちゃん



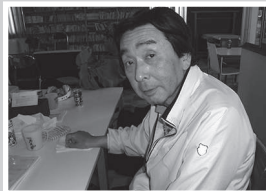
カラオケ頑張るぞー

いち



頑張ります

かめだ



年金をもらえる年になりました。

ちょうきち



血洗い命。

あもん



なんとかここまで来たぞー

おざき



毎日つかれるなー

あさひ



...

5月の行事

- 5月4日 潮騒ピザ & スパゲッティづくり
(茨城県立白浜少年自然の家)
- 5月5日 NA クリーンバースディ
- 5月10日 潮騒俳句会
- 5月12日 潮騒人間塾 ～三浦陽二さん(日本ダルク)
- 5月16日 吉川市民生児童委員協議会研修来所
- 5月16日 潮騒水田・田植え(手植えイベント)
- 5月13・19日 秋元病院メッセージ
- 5月26日 NPO 法人・潮騒 JTC 2018 年度定期総会
- 5月27日 潮騒家族会

6月の行事予定

- 6月8・9日 潮騒エイター隊 宮城県仙台慰問ツアー
- 6月9日 潮騒人間塾～白田美鶴さん(茨城町在住、詩人)
- 6月11日 潮騒フラワーロード(本施設前通り)
除草&花植え
- 6月28日 茨城県立藤代高校薬物乱用防止教育講演
- 6月10・16日 秋元病院メッセージ
- 6月14日 潮騒俳句会
- 6月24日 潮騒家族会

献金・献品を頂いた方 (5月15日現在)

- ・内堀 高良 様 ・宇留野 光子 様
- ・清水 時夫 様 ・白砂 文雄、栄子 ご夫妻 様

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。
本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを
実践することができておりますことをご報告いたします。

今後ともご支援くださいますよう、
なにとぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

「お父さん、お母さんが死んでから急に老け込んだね」。大学院生の娘が地元企業の就活のために帰省した際、いきなり切り出した。自分でも思い当たるフシがある。目の下の小じわがやたらと目立つようになり、歯磨きで部分義歯を外した時に、鏡に映った自分の顔はまさしく「ジジイ顔」そのものだ。昨秋の潮騒13年フォーラムの映像には、ステージの真下でカメラ撮影している自分が猫背の小男みたいに映っており、これじゃまるで「ノートルダムのせむし男」じゃないかと愕然としたものだ。この2年余り、体力気力の落ち込みが激しい事は自分なりにもリアルに自覚している。何よりも、生きることと張り合いがないのだ。自宅で仕事ができる環境にあるとしても、妻の死後はめっきり外出の機会が減った。以前は妻とよく食事や園芸店に出掛けたり、障害者の長男をミニドライブに連れ出したりしたので、他人様に自分の顔を晒す事に少しは気を使った。でも、今は自宅に引き籠り状態。「これではいかん!」と思うが、いかにせん気力が湧かず、食欲も減退気味だ。何をしても後ろ向きの生活の中、潮騒とのかかわりだけが今の自分を支えてくれている。仲間の皆さんと同じように役割を与えられている、という事はノン・アディクトの自分にも過小評価できない。言い古された表現だが、承認欲求が満たされる事は理屈抜きに生きるエネルギーに繋がるものだ。潮騒では、たまに同い年のチョーさん(現在は百寿に通所)に会うのが楽しみだ。彼は海上自衛官で調理部門の担当だったが、アルコール依存症を発症して職を辞し、曲折を経て潮騒に繋がった。ほぼ順調に回復してスタッフとなり、仲間の信頼も厚かったが、数年前に脳卒中で倒れ身体が不自由に。リハビリに励み、どうにか自力歩行ができるまでになった。会うたびに「こんな姿になって情けない」と悔しさをにじませるが、「お互い残された人生を頑張って生き抜こうよ」と励まし合っている。僕は信仰を持っていないが、神様は不公平だし、運不運は人を選ばない。人は強い運命を受け入れるしかない。どんな劣悪な環境に置かれようとも、心や身体が不自由になろうとも、置かれた場所で咲くしかない。いや、咲かなくても、そこに居場所があるだけで救われる。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2018年5月**Contents**

- P② 民衆の救済で決起した大塩平八郎について思う
- P③ 初挑戦手作りピザ & スパゲティ
- P④ 潮騒人間塾 三浦陽二さん(日本ダルク)
～「ダルクでクスリをやめ続ける」意味を25年の歩みで実感
- P⑤ 「追悼トークリレー」で元職人のシンさんを葬送
- P⑥ 埼玉県吉川市の民生児童委員が研修来所
- P⑦ 潮騒農場田植え体験
- P⑧ がーちゃんの極私的懺悔録 その3
～「真実の愛」を貰こうとするも貧しい現実との相克から妥協へと進む
- P⑩ 受刑者からの手紙
- P⑫ しおさい俳壇 5月のお題「田植え」
- P⑭ どっこい私も生きてます「ブーちゃんの回復記」/5月のバースディ
- P⑮ 行事予定 / 編集後記 / 献金・献品 / 目次

**■ 編集・発行:**

特定非営利活動法人
潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)
〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号
〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10
TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒アディクションビレッジ会館
(潮騒アディクション・ケアセンター)
〒314-0031 茨城県鹿嶋市宮中 4-4-5
TEL:0299-95-9991 FAX:0299-95-9992

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>

